

フ。ロ。ロ。ー。グ

中秋の名月。

長かった残暑もようやく過ぎ去り、徐々に過ぎし易い時期となってきた。

今年は例年通りの悪天候ではなく、去年に引続いて晴天で最高のお月見日和となっていた。そしてここ、博麗神社ではお月見という名目で小さな宴会が開かれていた。

「いやー、去年の中秋の名月の時に神社に来ておくべきだったなー」

ご機嫌で酒を飲んでいる少女。普通の魔法使い『霧雨魔理沙』である。

幻想郷での中秋の名月といえば、夜になると普通の人間は表には出る事はない。

狸に化かされるからである。満月の夜はより一層力が増して、普通の人間にとっては命の危険にさらされる事も少なくはない。

「あの時に魔理沙が居たら、どっちが本物か判らなくて両方ともコテンパンにしてたかもしれないわよ？」

暢気な事を言っている魔理沙にため息をつく少女。この神社の主であり、楽園の素敵な巫女

『博麗霊夢』である。

「……………うふふ、美味しそうな狸鍋らあ……………」

「……………」

魔理沙と霊夢の背後には、酔い潰れて寝ている少女が居た。

祀られる風の間人、人の身でありながら同時に神でもある現人神『東風谷早苗』である。

幻想郷では珍しく下戸である。

その理由は、外の世界からの外来人でもある彼女曰く「外の世界では、お酒は二十歳になっ

てから」という話らしい。

残念ながら、外の世界のルールは幻想郷では通じない。まだ慣れてないだけだと思われる。そんな早苗の寝言であった。

「いつの間にかダウンしてるし、コイツは何しに来たんだ？」

そう言いながら早苗の頬を突く魔理沙。

「私から言わせれば二人とも何しに来たのって話なんだけど……」

思い返すと、当日の昼間にやって来ていた魔理沙と早苗に去年化けた狸の話をしたのがきつかけだった。

「私の偽者か、この前の妖怪狐といいそろそろ変身料でも貰わないとな」

「面白そうですね！ 私も今年は博麗神社でお月見してみたいです！」

完全に野次馬モードに入った二人は、夜にやってくると狸と間違えられても困るという事でそのまま博麗神社で夜まで待っていたという事である。

「まあ、魔理沙と早苗は良いとしても、アレが居る限り下手な妖怪はやってこないでしょ」

霊夢が親指でクイクイツと指す。

「あら、アレ呼ばわりとは随分ですわね」

そう言いながらも、顔は笑みを浮かべている妖怪『八雲紫』が霊夢達より少し離れて座っていた。

幻想郷に住む人間・妖怪で彼女を知らない者は居ない。妖怪と言えば？ という問題がある
とすれば、間違ひなくその名前が挙がる大妖怪である。

「紫が居るなんて判ったら、化け狸なんて尻尾巻いて逃げ出すわよ」

「はっはっはっ、そりゃ違ひないね！」

紫の隣で大笑いをする小さな鬼が一人『伊吹萃香』であつた。

彼女は紫と旧友であり霊夢の事も氣に入っている様なので、たまに博麗神社にやつてくる。

「萃香。笑つてるけどあんたも同じよ。まあ、ちょうど良い狸避けになつてるからいいけど」

霊夢は正直どうでもいいと思つていた。

「まったく、お前らが来た所為で狸見物じゃなくて、ただのお月見になつてしまつたじゃない
か」

か

魔理沙は若干不貞腐れていた。そもそも魔理沙と早苗が既に居る時点で、既に寄り付いては
こなかつただろう。

「つーか、紫はなんで神社なんかに来たんだ？ てつきり白玉楼辺りで幽々子達と月見でも
やつてるのかと思つてたぜ」

やつてるのかと思つてたぜ

「去年は幽々子の所に居たのよ。今年は家で過ごそうと思つたけど、まさか二年連続でお天気
になるとは思わなかつたからね、たまたま博麗神社を覗いてみたらあなた達が居ただけの話」

「はいはい！ 私はねえ——」

萃香が聞いてもいないのに自己主張をする。

「いや、お前には聞いてないから別にいい。どうせ紫と同じでふらふら来てみたら——つて奴

だろ」

「なんだよー。まあ大体あつてるけどさ」

そんな他愛のないやり取りをしている四人の背後で……

「くちゅん！」

——と、大きなくしゃみが聞こえた。全員が背後を振り返る。

「くしゅん！ ううう……」

再度くしゃみをする早苗。

「……もう、しょうがないわね。風邪でも引かれたら困るし、ちょっと布団敷いてくるわ」

霊夢はやれやれといった感じで立ち上がり、自分の部屋に戻っていった。

「これじゃあ風祝が風邪祝になっちゃうな」

魔理沙が旨い事を言ったつもりであったが、周りの反応は冷やかなものであった。

紫にならまだしも、萃香までもが「うわー、さぶうー」という感じの視線で魔理沙を見てくるのには、さすがにやってしまった感が否めない。

「……それにしても今年も良い月だなー」

誤魔化した。そんな事は気にする様子もなく、紫は空を見上げて言った。

「そうね、『中秋の名月、十年に九年は見えず』って言葉もある通り、去年は珍しく天気良かったけど、今年も天気になるなんて珍しい事もあるわね」

魔理沙と萃香も紫と同じ様に、境内から見える満月を見上げていた。

満月というのは、妖怪の力が一番強くなる日と言われている。普通の人間からしてみれば、

満月の日というものは余り良い日とはいえないのである。妖怪はまた別であるが……

「……魔理沙ー！ 早苗連れてきてちょうだいー！」

と、奥の部屋から霊夢の声が聞こえてきた。

「なんで私なんだ？ 力仕事だったら萃香。お前に任せる」

自分の仕事を萃香に押し付けようとする魔理沙。

「えー、魔理沙が頼まれたんだから魔理沙がやんなよー」

もちろん断られる。

「えー、こんなか弱い乙女に力仕事をさせろってか？」

魔理沙はまだごねる。

「魔理沙みたいにパワー溢れるか弱い乙女とか見た事ないんだけどー」

霧雨魔理沙といえば「弾幕はパワーだぜ」がアイデンティティーの一つであり、そんな魔理

沙がか弱いなんて言っても誰も信じる訳がない。

「ちよつとー!? まだなのー!？」

魔理沙がごねている間に霊夢は痺れを切らしてしまったようである。

その様子を静観していた紫であったが、

「もう……、下らない事で霊夢の機嫌を損ねないで頂戴」

紫は溜息を付きながら、右手に持った扇子で空をなぞる。

すると、早苗が床の下にストンッ、と落ちていった。

正確には、紫が出した『スキマ』に落ちたのだが、

『スキマ』とは両端にリボンが付いていて、中は複数の目が蔓延っておりドロドロとした淀んだ空間の切れ目であり、その中に落ちて行った早苗はというと――

「……むぎゅ!!」

「うわあ!」

霊夢が敷いた布団の上に、突如スキマが現れて早苗が落ちてきた。

いきなりの事で霊夢は吃驚してしまった。

ダツダツダツダツ! と霊夢が走って戻ってくる音がする。

「ちよ、ちよつと紫! いきなり早苗が落ちてきたからびっくりしたじゃないの!」

「あらあら、礼を言われても、怒られる筋合いはないわよ? 元はと言えよ――」

「ま……まあまあ! 悪いな霊夢。私が紫に頼んで運んでもらったんだ。そうだよな?」

火の粉が降りかかる一歩手前で、先手を打つ魔理沙。

「……そういう事にしてあげますわ」

「魔理沙ったらまた楽をしようとしたのね。おかげで私の寿命が――」

紫を丸め込む事に成功したが、霊夢の怒りを鎮めることは出来なかった。

「悪かったって! そんな事よりほら、飲み直そうぜ!」

魔理沙は霊夢に酒杯を渡す。はぐらかされているのに納得はいかないが、魔理沙から受け取った酒を一気に飲み干し、

「ぶはーっ! 今日とはことん飲むわよー!」

「おー！ いいぞいいぞー！」

靈夢に触発された萃香も、自前の伊吹瓢を一気に飲み干す。

と言つても、この瓢箪は無限に酒が湧き出てくるために、飲み干す事は実際に不可能で転倒防止用のストッパーが付いているので、一度傾けても、一定量までしか出ない仕組みになっている。

「なんだ。結局いつも通りじゃないか」

「あなたはいつも通りが不満かしら？」

紫は魔理沙に問いかけるが、魔理沙は屈託のない笑顔で答えた。

「いや、こういういつも通りは大歓迎だぜ——ってどわあ！」

背後からいきなり靈夢に抱きつかれる魔理沙。靈夢の顔を見ると完全に酔っ払っていた。

「こらあ魔理沙あ、あんた自分から飲め飲め言つといて、全然足りないんじゃないのお？」

「判った！ 判ったって！」

魔理沙は自分のペースで飲むつもりはしていたが、靈夢がこうなってしまうては無理に近いだらう。

——こうして、宴会もあつという間に終わりを迎えてしまった。

居間では、靈夢と魔理沙と萃香の三人が折り重なるように酔い潰れているように眠っていた。

一番下になっている霊夢がうなされているようであった。

その様子を見て笑っていたのが、八雲紫であった。

残りの酒を飲み干して空を見上げてみるが、既に月は沈んでおり縁側からでは森に阻まれて見る事はできない。

紫は静かに立ち上がり、正面に自分の家に帰るためのスキマを開く。

開かれたスキマを潜りながら紫は一言呟いた。

「……それでは、良い夢を」

それは誰に対して言ったのか……？

それだけ言い残すと、紫はスキマの中に消え博麗神社を後にした……。